

LEGEND Travel Award 2026 学会参加レポート

(第 85 回日本癌学会学術総会)

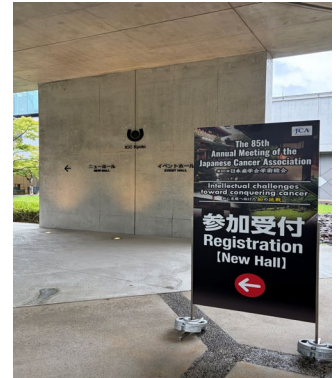
横浜市立大学 大学院医学研究科 薬理学教室

柴田 智博

2026 年 9 月 24 日から 26 日にかけて、国立京都国際会館で開催された「第 85 回日本癌学会学術総会」に参加してまいりました。本大会では、がん研究に携わる研究者による最新の研究成果の発表と、活発な討論が行われました。

3 日間の会期中、私は、研究開始当初から着目している乳癌の進展に関する研究や、腫瘍微小環境に関する研究発表を中心に聴講しました。特に、「腫瘍別シンポジウム 1 乳がんの臨床と基礎研究の融合」のセッションは、今後の研究を進めるうえで大変参考になる内容が多く、特に印象に残りました。

このセッションでは、京都大学の西村友美先生が、がん発症前の遺伝子変異数を予測するシステムを構築し、乳癌組織と正常乳腺組織を比較することで、思春期などの早期に生じた遺伝子変異が、どのような過程を経て将来の乳癌発症につながるのかを明らかにした研究を報告されました。また、信州大学の大場崇旦先生は、トリプルネガティブ乳癌において、免疫チェックポイント阻害薬（ICI）治療後に CX3CR1 陽性 T 細胞が増加することが、ICI の治療効果を予測する指標となり得ることを報告されました。さらに、がん研究会の家里明日美先生は、リンパ節転移の過程において、リンパ管がクラスターを形成した腫瘍細胞塊を認識し、その腫瘍細胞塊を取り込むようにしてリンパ管内へ誘導することを報告されました。また、一般口演の中で特に印象に残ったのが、関西医科大学の森汐莉先生の発表です。慢性ストレスによって肺の血管透過性が亢進し、がん転移が増加することが報告されました。さらに、慢性ストレス下では血中のコルチゾールやアドレナリンが増加し、これらが肺血管内皮細胞に作用することで血管透過性を亢進させることが示されました。血管内皮と腫瘍微小環境、さらには全身性の生体反応との関連を示した研究であり、私自身の研究テーマとも関連する点が多く、今後の研究を考えるうえで非常に参考になりました。また、腫瘍血管や腫瘍微小環境を標的とする研究も多く、血管と免疫の双方から腫瘍を捉えることの重要性を再認識する機会となりました。



今回、私は「Endothelial ANP–GC–A signaling orchestrates vascular normalization and anti-tumor immunity」という演題でポスター発表を行いました。本研究では、心房性ナトリウム利尿ペプチド（ANP）が腫瘍血管内皮細胞に作用し、腫瘍血管の正常化を介して抗腫瘍免疫を活性化することを明らかにしました。ポスター発表では、血管新生やがん転移を専門とする先生方から多くの質問をいただき、自身の研究の発展につながるさまざまなご意見を伺うことができました。特に、血管新生因子に対する作用の特異性や、ヒト検体における研究結果との関連性などについて、専門の先生方から貴重なご意見をいただき、今後の研究課題を考えるうえでも非常に有意義な機会となりました。

今回の学会参加を通じて、最新の研究成果を学ぶだけでなく、国内の研究者の先生方と直接意見交換を行うことで、自身の研究を客観的に見直し、今後取り組むべき研究課題について考える貴重な機会を得ることができました。本学会で得られた知見や人的ネットワークを今後の研究に活かし、新たな成果の創出につなげていきたいと考えています。最後になりましたが、本大会への参加にあたり、ご支援を賜りましたトミーデジタルバイオロジー社および BioLegend 社の関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。